



TITLE:

<図書紹介>Lower Mekong Hydrologic Yearbook, Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Bassin, 1964

AUTHOR(S):

南, 勲

CITATION:

南, 勲. <図書紹介>Lower Mekong Hydrologic Yearbook, Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Bassin, 1964. 東南アジア研究 1965, 3(2): 148-148

ISSUE DATE:

1965-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55064>

RIGHT:

本書は Mekong プロジェクト, Nam Pung プロジェクト, Pattni プロジェクト, Nakorn Srithamarag プロジェクトおよび河川開発プロジェクトにおいて, National Energy Authority によって作業をされ集計されたものである。最大の目的は降水量と流出量との関係を研究するにある。

流量観測所の数は46ヶ所である。内容は月間流出量, 平均流出量 1000km² 当りの平均流出量, 流出高, 流出量, 最大日流量および最小日流量がある。

なお, このうちの観測所の一部はメコン河開発の一環として建設された部分も含んでおり Lower Mekong Hydrologic Yearbook と多少重複する点もあるが, 東北タイの水利計画に対する研究を行う場合の重要な参考資料の一つと考えられる。

1962年の水文年報は1964年に出版され, 1963年のものは1965年に出版されたが, 何れも販売はしていない。何れも市販されていないもので寄贈形式で頒布されている。(南 勲)

Lower Mekong Hydrologic Yearbook.
Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Basin, 1964.

メコン河は4ヶ国にまたがる大河川でありその水力電気, かんがい, 舟行, 洪水調節および民生に対する総合的な発展を目的として, カンボジア, ラオス, タイ, ベトナムの4ヶ国により, メコン河委員会が設立されている。本水文データはこれらの諸国の水利開発分野で各国それぞれに重要な基本的な資料である。とくに水源計画に際しては技術的にも経済的にも重要な資料である。本書により低部メコンの流量特性の概要をつかむことができる。

最初の年報は1962年の水文資料に対するもので, 以後毎年継続して出版することが決定されている。1963年度の水文年表は1964年2月に出版された。

本水文年表はその初版から数えて現在まだ第2巻しか出ていないが, 東南アジアの水利計画を研究する上に極めて重要な資料となるものと確信している。

本水文年表の内容は流量観測値がメコン河本流ならびに支流に対して集録され, 次に流水中に浮遊運搬されている泥土量, 日降雨量がラオス・カンボジア・タイ・ベトナムに渡って記され, また日蒸発量および毎

日の風速が記録されている。

いずれも販売はしていない。(南 勲)

Theodore Friend: *Between Two Empires, The Ordeal of the Philippines, 1929-1946.* Yale University Press, New Haven, Conn., 1965. xviii+312p.

このたび「2つの帝国に挟まれて——1929年から1946年に至るフィリピンの試練——」と題する本書を手にして, 私はひじょうに嬉しかった。というのはフィリピンを理解するためには, その歴史的背景をよく知っておくことが必要である。とりわけ, フィリピンとアメリカとの関係の歴史的展開こそ, フィリピン理解の鍵であるといえよう。ところが, これについてまとまった文献がこれまで出版されていなかった。

もともと米比関係は, 本書の著者, The State University of New York at Buffalo の歴史学準助教授フリード氏によると, つぎのように区分される。

- 1) 1896—1902: スペインおよびアメリカにたいするフィリピンの革命戦争。
- 2) 1901—13: 共和党政権下での政府・教育の《アメリカ化》。
- 3) 1913—21: 民主党政権下での行政の《フィリピン化》とナショナリズムの奨励。
- 4) 1921—29: フィリピンの希望とアメリカの抑止との均衡の漸次的実現。
- 5) 1929—35: 第1次植民地危機: 大恐慌・日本の膨張およびフィリピンのナショナリズムのためアメリカ議会は独立のスケジュール設定の方向に動く。
- 6) 1935—41: コモンウェルス時代: 不確実だが部分的に成功であった独立準備。
- 7) 1941—46: 第2次植民地危機: 日本の侵略および部分的な《日本化》, アメリカによる解放およびフィリピン主権の完全な獲得がつづく。

本書はこのうちでも, より重要な1929年の大恐慌から始って1946年のフィリピン独立に至る期間をとりあつかう。著者は, フィリピン, アメリカ, および日本の文書を渉猟し, またこの3国にまたがるこの関係をインタビューしている。非常な努力と時間のかかった仕事だ。(アメリカ人の近代史あるいは現代史研究がとっているこの方法は, わが国ではもっと学びとら